連載「大友時代を生きた人々」

国際文化学部長 鹿毛敏夫教授の「アフォンソ・ヴァス 阿久根で落命したポルトガル商人」が掲載

●大分合同新聞朝刊 2024年11月22日(金)

文化・アート

大友時代を生きた人々

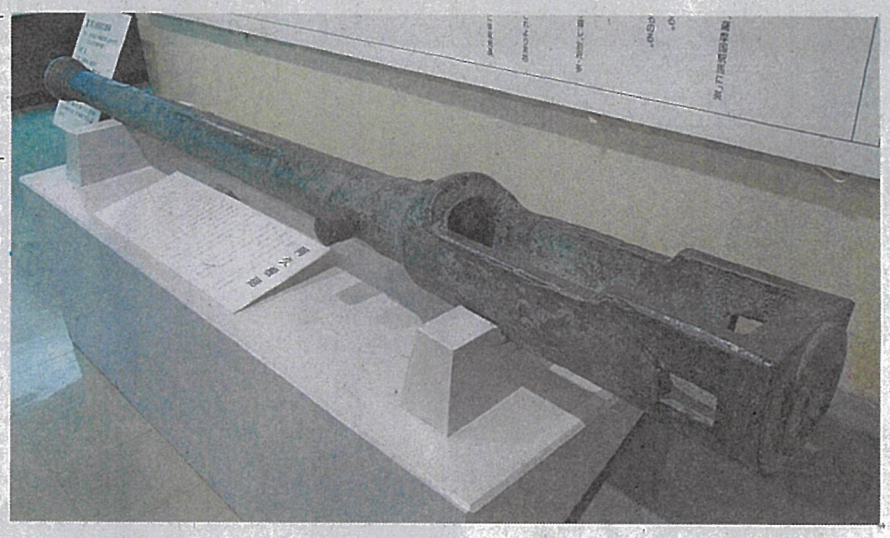
鹿毛 敏夫

アフォンソ・ヴァス 阿久根で落命したポルトガル商人

ポルトガル・リスボンの科学学士院図書館蔵「日本書翰集」の中に、永禄4(1561)年、「El Rei de Conguxima(鹿児島の国王)」を称した戦国大名島津貴久が、インド副王(ポルトガルがインドに設置した総督)ドン・フランシスコ・コウティーニョに宛てた書状の写しがあります。その日本語訳は次の通り。

「昨年、〔イエズス〕会の2人のイルマンが、我が鹿児島(Conguxima)国に来て、説教をしつつ我が領内を巡った。彼らが到来したその年、当地では戦があり、援軍として送る必要のある船を準備することに忙殺されており、吾が望む、彼らに相応しいもてなしをしなかった。さらに、1隻のポルトガル商人たちのナヴィオ船が当地のマンゴ(Mango、山川)という港にやって来たが、やはり同じ戦の際に来たため、吾が望んでいたもてなしをしなかった。それどころか、〔国〕外からこちらへ略奪しに来ていた賊がいたゆえ、当地にポルトガル人たちがいるとは知らず、アフォンソ・ヴァス(Afonso Vaz)と称する者と戦闘になり、〔賊が〕彼を殺してしまった。それによって吾は不快な思いをした」

書状で貴久は、鹿児島を訪れた2人のイルマン(修道士)と、山川港(鹿児島県指宿市)に着岸したポルトガル商人に対して適切な応対ができなかったこと、特に、領外から来た海賊によって、現在の阿久根市に滞在中だったポルトガル商人アフォンソ・ヴァスが殺されてしまったことをわびています。



阿久根の海岸で見つかったファルカン砲(阿久根市民交流センター蔵)

地元には「とっぽどんの墓」と呼ばれる小祠があります。それは、「外仏(とっぽとけ)」が訛ったものらしく、賊に襲撃されて悲惨な最期を遂げたアフォンソ・ヴァスの遺体を村人たちが葬った、と言い伝えられています。

また、昭和32(1957)年には、阿久根の海岸でファルカン砲(小型大砲)が発見されました。全長3㍍、弾走部2・49㍍、薬室61㌢、口径7㌢の銅製後装砲で、その砲身には、ポルトガル王室の紋章と天球儀の文様が陽刻されていました。

九州大の中島楽章氏によると、この表象は、ポルトガル国王マヌエル1世(在位1495~1521年)時代から、王室統治下で鋳造される火砲に用いられたもの、とのこと。見つかった大砲は、同時期のポルトガル領で鋳造され、来航したアフォンソ・ヴァスの船に搭載していたものが、海賊襲来時の暴動で海中に沈んだものかもしれません。

(名古屋学院大学国際文化学部長・教授)

=月1回掲載=